

令和4年度 姉妹都市交流「学校新聞特派員」

# 学校新聞特派員報告書



派遣地 宮城県仙台市  
令和4年8月5日（土）6日（日）

## 中野市立高社中学校

# 宮城県仙台市について

仙台市

面積 785.8km<sup>2</sup>

人口 109.6万人

中野市

面積 112.2km<sup>2</sup>

人口 4.2万人

## 『杜の都 仙台』

仙台市は人口100万人以上を有し、伊達政宗公の時代から日本・東北地方の政治と経済の中心地として発展してきた。大都市でありながら、自然と調和した『杜の都』として知られている。



## 中野市と仙台市の繋がりって？

作曲家中山晋平を生んだ、長野県中野市と詩人土井晩翠を生んだ宮城県仙台市、作曲家滝廉太郎ゆかりの大分県竹田市の3つの市は、音楽を通じて相互に友好関係を深め文化的な香り高い近代都市を建設するために昭和42年に音楽姉妹都市として提携しました。これまでも、各市の記念式典やコンクールなどに参加し交流を深めてきました。また、震災や豪雨災害の際には、支援物資や見舞金を送られるなど、姉妹都市として互いに助け合ってきました。

## 1日目 八軒中学校との交流

八軒中学校に到着すると、体育館に移動し歌を披露してくださいました。人数が少ないのにも関わらず、歌声の迫力やその表情にすごく圧倒されました。お聞きした『あすという日が』という曲は、生徒たちの先輩が東日本大震災の時、避難所で歌った曲で、八軒生は、それから八軒の誇りとして大切に歌い継がれていると紹介していただきました。そんな、素敵なエピソードを持った歌に出会えて、皆さんの歌声とともに心がほっこりしました。

その後は、教室に移動し生徒会執行部の皆さんと、様々なことを話題に談話をしました。まずは、八軒中について知りました。印象に残っているのは、さすが、東北と思わず声に出しそうになってしまった、よさこい祭りについてです。私たちが訪問した日の午前中に最終日を迎えたようですが、生徒たちは地域で発表するために執行部と各クラスのルーム長がよさこいに全力を捧げる活動があると紹介していただきました。動画を見て、話を聞くととてもハードなようで肉体的にも、精神的にも大変そうな感じがしました。しかし、よさこいの完成度に重点を置くというよりは、団結力やリーダー育成など活動を通してのスキルを上げられるような目的も感じました。他にも、生徒会の目玉企画でもある壮行会について聞きました。ここでもさすがお祭り文化が強い東北民！と驚いてしまったのですが、壮行会では、『八軒魂』とデカデカと書かれた服を着て応援をしていました。文化の違いにも楽しみながらたくさんお話を聞くことができました。生徒会企画や学校行事など、明日から八軒生になれそうなくらい端から端まで知ることができました。今度は、高社中生の番でした。まずは、我が中野市が誇る、ぶどうやりんごのエース達で中野市をしっかりと宣伝し、次は高社中について話しました。私たちからは、高社祭の様子や普段の生徒会で行う活動、やタブレットでの書類管理の仕方などについて話しました。普段このようなことに不慣れですが、生徒たちが反応してくれたり、真剣な眼差しで聞いてくださったりしたので楽しく話すことができました。文化の違いなど、異なることも多いですが、七夕の時期が中野市と同じということもあり、親近感が沸きました。私たちが訪問した時は、仙台市は仙台七夕祭りを翌日に控えていました。学校の中にも短冊があったり、七夕に関連したイベントがあったりと素敵な雰囲気でした。そして、最後は記念写真や中野市からの特産物を贈りました。短い時間でしたが新たな知識を得たり、仲良くなったり、とても濃密な時間を過ごしました。



## 仙台を満喫！

### ① 牛タン編

1日目の夕飯には『伊達の牛たん本舗』ですごく肉厚な牛タンを食べました。思わず息を吞んでしまうようなお店の華やかな雰囲気と目の前にある輝く牛タン、まさに夢のようでした。

今まで食べた牛タンの中で別格に美味しかったです。



### ② 仙台花火祭編

仙台七夕まつりの前夜祭ということで夜空に鮮やかな花火で彩られていました。市役所の方に特別に指定席を取っていただいたので、1万6千発もの花火を優雅に堪能できました。夜景も綺麗で夜の街歩きも涼しくて気持ち良かったです。最高でした。

### ③ 仙台七夕まつり編

8月7日からは仙台七夕まつりが始まります。アーケードには色とりどりの豪華な七夕飾りが施されていました。華やかな街を見物するのも楽しかったです。東北3大祭りの一つに触れることができ嬉しかったです。仙台市の眺めを堪能できました。



## 2日目 晩翠草堂に行ってみて

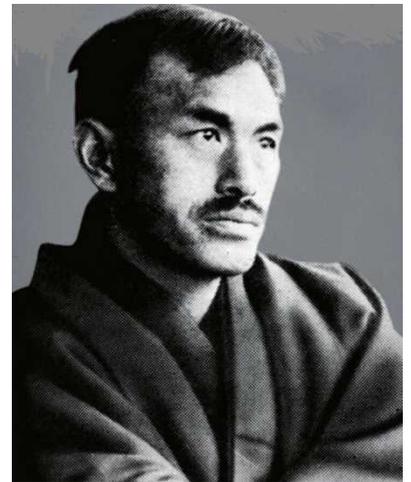
詩人、英文学者として有名な土井晩翠の旧居を見学し、係員の方からの説明を聞きました。

### 土井晩翠ってどんな人？

土井晩翠（1871～1952）

出生地：宮城県仙台市

代表作：「荒城の月」



### 土井晩翠のこれまでの功績

- |             |                                     |
|-------------|-------------------------------------|
| 明治4（1871）年  | ・仙台市北鍛冶町に生まれる<br>第二高等学校（東方大学）教授を務める |
| 明治34（1901）年 | ・「荒城の月」が発表され不朽の名作として知られる。           |
| 昭和24年       | ・初めての仙台市名誉市民に                       |
| なる。         | ・現在の晩翠草堂に住む。                        |
| 昭和25年       | ・詩人として初めて文化勲章を受ける。                  |
| 昭和27年       | ・80歳で死去した。                          |

係員さんの話を聞いて、晩翠は裕福な家で育ったことや英語が得意なことなどを知ることができました。晩翠は、中学や高校などの校歌をたくさん作ったようで信州大学の校歌も、晩翠が作詞したことが記録に残っていました。晩翠草堂は、仙台のホテルやビルなど近代的な街並みの中にあり、昭和時代に建てられたものを記念館にしているのです。ポツンと大都市の中に昔ながらの障子や畳の家があるのが独創的で不思議な感じでした。

震災で周辺の多くの建物は被害により再建されたようですがこの家は、被害が少なく、ガラス1枚も割れなかったそうです。昔の建物は現代に負けないくらいすごいなと思いました。



## 震災の街から学ぶ

～3. 11メモリアル交流館、荒浜小学校を訪れて～

私たちは、2011年3月11日に発生した東日本大震災で多くの被害を受けた仙台市東部沿岸部に行きました。メモリアル交流館では、立体地図や映像を見ながら震災当時の街の様子を聞きました。震災遺構の荒浜小学校では、被害にあった当時のありのままの姿を見学しお話を聞きました。

### 震災の怖さ

震災前と現在を比べた街の写真では、震災前にはあった建物や土地がなくなっていたりと、賑やかだった商店街が何もない荒地になっていたりと、震災によるダメージを痛感しました。一瞬の出来事でこんなにも変わり果ててしまうことに、啞然としてしまいました。荒浜小学校では、津波で折れ曲がったベランダの鉄柵に崩れ落ちボロボロになった天井、黒板が抜けた教室に2階まで押し寄せた津波による壁の変色、卒業式を間近に控えた児童たちの学校内の装飾の散乱など、あちこちで悲劇を物語っていました。映像ではなく、この目で感じている、無念な姿に心苦しい気持ちになりました。

### 震災当時の様子

荒浜小学校は、街唯一の頑丈な建物で震災当時も多くの住民が避難してきました。荒浜地区では、2200人の住民が暮らしていました。荒浜地区には最大9メートルの津波が押し寄せ、186人の命を奪いました。荒浜小学校では、避難している児童・住民320人全員の命を守りました。

震災が発生したあの日、怖がる低学年を笑わせて元気づける高学年、消えゆく街に落胆する地域の人たち、命を守ろうと懸命に指導する地区会長や先生たち、必死に生きようと、カーテンや暗幕を布団代わりにし、暖をとる人たち、、、震災当日の逼迫するエピソードを聞き、なぜか当時の声が校舎から聞こえてきそうでした。全員が今、辛い心境の中で、声を掛け合い、前を向きやるべきことをやったからこそ全員避難だったのだと思います。校舎の中には、黒板に避難してきた住民を統括するための情報がそのまま残っていたり、一階の廊下には、車が瓦礫とともに押し流されてきている写真などが記録されたりしていました。校舎に残されたもので最も私の心を痛めたのは、学校の中に貼られた学級目標や、おそらく6送会などの装飾であろう萎れた風船など、日常が震災直前まで普通にあったということを示す光景でした。この一瞬の出来事により大勢の人の大切な人、思い出など奪った震災に無念を感じました。

しかし、校舎の中には、辛い過去の様子だけが残っているのではなく、復興に向けた、明るい言葉もたくさん残されていました。6年生の教室では、担任の先生によるものであろう、児童に向けたメッセージや、今まで撮りためてきた運動会などの写真がありました。この荒浜に戻ってきた人の復興を祈る応援メッセージや訪れた観光客などによるメッセージなどが黒板に残されていました。荒浜は、前を向き、多くの人に支えられ、確実に復興しています。

### 震災の街から教えてもらったこと

メモリアル交流館や、荒浜小学校を実際に訪れて、私たちがすべきことを示してくれました。一つは同じ悲劇を繰り返さないように日頃からの備えや避難訓練を今まで以上に意識を持ってやることです。今までは誰かの後をついていっただけだったけど、自分で考えて行動することに訓練の本当の価値があるのだと思うようになりました。もう一つは、この震災を後世に語り継いでいくことです。実際に震災の様子をこの目で見てきた私たちだからこそ、絶対に忘れてはいけないと思います。このことは震災で生き残った人たちの使命なのだと思います。これらを果たせるのは、未来のある子供たち、そう、私たちです。私たちに未来がかかっているのだと思います。

## 姉妹都市交流を通して

この2日間を通して、今まで知らなかったことを、頭が破裂しそうになるくらい知ることができました。新たな人との出会いや新たに掴んだもの、この2日間で濃密な思い出ができました。

仙台と聞くと、私はやはり震災のイメージが強く、実際に震災について学んで、今後生きる上でも参考になるような刺激もたくさんあり、想像以上にこの姉妹都市交流に意味があるのだと感じました。

中山晋平先生と土井晚翠先生の繋がりがあって、このように今でも仙台市と交流が続いていることに感謝したいと思います。また、仙台市役所や中野市役所、八軒中学校など、たくさんの方の協力により、私たちは行くことができました。本当にありがとうございました。

# 宮崎仙台市について

仙台市は東日本大震災があった場所でもた、牛タンやずんだ餅、仙台七夕祭りが有名なところとして知られています。私達は最初に仙台の市役所に行きました。そこでは七夕祭りや牛タン、ずんだ餅の事について話しました。仙台の話だけでなく、長野県の話にもなりました。仙台には食べ物では他の県にはないような物があるのでそこが魅力の1つだと私は思いました。

## 八軒中学校と交流して

私達は八軒中学校と交流しました。八軒中学校の生徒会や体育祭、部活の様子を聞きました。

生徒会役員は本校では3年生のみですが、八軒中は3年生数名に2年生の学級長などを加えて10名程度で生徒会活動を運営しているのを聞いてびっくりしました。生徒会の内容としては、たくさんの人に「ありがとう」を伝える「らふりん」と言う企画をしていました。その企画では、紙にたくさんの人にありがとうの気持ちを書いて壁に貼っていく事でした。これをやる事で実際に言えないことでも紙に書いて伝えることができるし、昇降口に貼って皆が見やすいようになっているからいい企画だと思いました。

次に体育祭の話になりました。でも八軒中学校には文化祭がないことを聞きました。でも八軒中学校では文化祭ではないけど体育祭の中で私が面白そうだなと思ったのが、段ボールをひいてその上に河川敷で拾ってきた石を置いてガムテープで固めることで足つぼになるからそれを利用して先生方にやってもらう企画でした。それをやることで先生方が今よりも健康でいられると考えて生徒達が企画したことを聞いて、みんなが凄い先生方の事を大事に思っているのだと感じたし、普段は見られない先生方の姿を見る事もできると言っていたので、いい企画だと思いました。

部活の方では、私たちには野球部とか陸上部などどの学校にもあるような部活しかないと思うけど、向こうは新体操など珍しい部活があることを知りました。高社中学校にもソフトボール部という近隣の学校にはない珍しい部活だと思います。八軒中学校のみんなは、私たちと交流する2日目にリーダー研修会でよさこいを踊ったと言っていました。その映像を見させてもらいましたが、たった2日でみんなが完璧に踊っていたので凄いと思いました。

このように交流会を通して、私たちにはない生徒会の活動や部活の様子を聞くことで、たくさんのことを学ぶことができました。八軒中学校のみんなとも仲良くなることができ、楽しく過ごせたので良かったです。



## 土井晩翠の事について

土井晩翠は、明治4年仙台市で生まれました。小さい頃からお父さんの影響で漢字に興味がある一方で、英語学者斉藤秀三郎の仙台英語学校に通っていました。23歳で東京帝国大学英文科に進んで今でいう「帝国文学」編集委員の一人として誌上につぎつぎと作品を発表しました。そのころは明治32年、第一詩『天地友情』を出版しました。このように壮大で神秘的な詩想は当時の青年達に熱く迎えられ、嶋崎藤村とともに日本近代詩に「晩藤時代」と称される大きな足跡を残しました。そして、明治34年には『中学唱歌』に掲載され、皆さんが知っている「荒城の月」が日本を代表する歌曲として広く知られています。この歌を作曲したのは、滝廉太郎さんです。明治33年には二高等学校教授として故郷である仙台に帰りました。

代表詩集には、『天地友情』、『暁鐘』などの作品があります。長野県の信州大学の校歌も土井晩翠が作詞しました。昭和22年～24年には、日本芸術院会員になり、仙台市名誉市民に推されました。このようにたくさんの詩を書いたり、出版したりすることで、昭和25年、文学勲章を受賞しました。

その後、昭和27年、10月19日肺炎で亡くなってまいす。これが土井晩翠の経歴になっています。



# 東日本大震災について

私たちは東日本大震災で実際に被害にあった「荒浜小学校」に行きました。荒浜小学校は、1873年（明治6年）に創立され、震災当時は91人の児童が通っていたそうです。この小学校は、4階建てで津波は2階の廊下まで押し寄せました。1階には保健室、1年1組、2年1組の教室があります。1階は天井まで浸水し、津波が突き抜けました。2階の廊下には家庭科室、職員室、校長室などがありました。1階にあった1年1組に教室には3台の車やがれきなども流せれて一緒に入ってきたそうです。津波は2階まで一瞬にして押し寄せました。津波によって1階や2階のフェンスが壊れてしまっていました。震災当時、周辺には高く丈夫な建物はこの小学校しかなかったため、児童・教職員・地域の方々も含め、320名の方が避難して救出されました。その一方で荒浜地区周辺だけで186以上の方が亡くなっています。震災が起きた時は3月で寒い時期だったので、避難物資も毛布だけでなく校舎内にあった段ボールや紅白幕などで寒さをしのぎ、ご飯なども非常食を食べて過ごしていたそうです。

建物の中に入って教室を見て回りました。そうしたら、黒板のところに今までの「感謝」の気持ちがたくさん書いてありました。「ありがとう」や「また会いましょう」などみんなが元気になれる言葉やお世話になった人への手紙が書いてあっていいなと思いました。手紙を読んで、本当に辛い思いをした人がたくさんいるんだなと思いました。辛い思いをした人が少しでも色々な人が書いたメッセージを読んで元気になってくれたらいいなと思いました。私たちがこの東日本大震災のことを3月11日、3・11として忘れない日にしたいです。



# 仙台市との交流を終えて

私は、2日間の仙台市との交流を通してたくさんのことを学ばせてもらいました。八軒中学校とはこの交流だけで終わらずに、仙台と中野で離れているけど、オンラインなどで一緒に行事をやったり、生徒会新聞も一緒に作ったりしてこれからもこの関わりを大切にしたいです。

土井晩翠については、実際に晩翠が暮らしていた家に行って今までの経歴を知ることができたので良かったです。

荒浜小学校では、実際に津波が来た所に行ってあんなに津波の跡が残っているところを見るのは初めてだったので、凄いい経験をさせてもらったなと思いました。地震や火事など自然災害をなくすことは簡単にはできませんが、災害が起きてから、避難したりすることで災害による死者を出さなことは私たちの努力次第によって可能なことだと思います。

死者をなくすために、どこの学校でもやる避難訓練を大切に行なっていきたいです。例え訓練だとしても気を抜かないようにして、その時の状況がどうなっているかなどちゃんと確認して行動することが大切だと思います。東日本大震災みたいにいつ大きな震災が自分の所に来ると思って心の中で準備しておきたいし、東日本大震災のことを忘れたくないし、忘れてはいけないと思いました。

土井晩翠さんが作った校歌が長野県にもある事を知ったので、滝廉太郎さんと土井晩翠さんの関わりについてもっと調べていきたいです。

この2日間仙台の魅力がたくさん感じる事ができ、経験することができたので仙台市役所、八軒中学校の皆さん、中野市市役所の方に感謝したいなと思いました。ありがとうございました。

## 八軒中学校訪問

私達は仙台に着き、市役所表敬訪問後、八軒中学校に行きました。

最初に、震災後に避難場所を訪問した際に披露してきた歌を歌って聴かせてくださいました。十数人しかいなかったのですが、とても上手で、強く生きていこうという力強いメッセージが伝わってきました。その後、八軒中学校の生徒会役員の方と交流をさせていただきました。まず驚いたことが、役員に2年生がいたことです。高社中学校では生徒会役員は3年生のみで構成されていますが、八軒中学校では、2年生の代表と3年生の代表で決めるシステムでした。それと、リーダー研修会というものがあり、各学級の学級長が集って、交流やイベントを行い、リーダーとしての統率力を高めるという会があることをお聞きしました。高社中学校でもこの活動をやりたいと思いましたが、また、文化祭がなく、その代わりに陸上カーニバルという運動会があるそうで、近くの陸上競技場を貸し切りにし、色々な種目をやるそうです。私たちの学校では、高社祭の中に組み込まれているので文化が違って刺激をもらいました。



## 晩翠草堂を訪問して

2日目は、最初に土井晩翠が晩年まで暮らしていた家に行きました。そこは一種の資料館となっており様々なことがわかりました。私はここに来るまでの土井晩翠のイメージは「荒城の月」の作詞をした人という印象しか持っていませんでしたが、ここにきてその印象が覆されました。最初に驚いたのが、土井晩翠はとてつもない天才であったことです。土井晩翠はわずか9歳で漢文の勉強をし、15歳から英語を習い始め、帝国大学に進学し、英語の書籍の翻訳家として働き、ギリシャ神話の翻訳などもしていました。さらに、詩人としても活躍し、詩集を何冊も発行していました。イギリスに留学していた頃、夏目漱石の看病などもしていたそうです。「荒城の月」の作詞は曲が作られた後であり、曲のイメージから作詞を行っていたそうです。ここで、土井晩翠の家の話に戻りますが、東日本大震災の際にそこも結構強く揺れ、その目の前の建物は、コンクリの壁にヒビが入ったそうですが、土井晩翠の家にはなんの被害もなかったそうです。ガラスも一枚も割れず床も当時のままで、昔ながらの家を見ることができます。そこにはビルが立ち並んでいるのですが、そこだけ古民家になっており、不思議な景観になっています。



## 荒浜小学校

次に向かったのは、震災で奇跡的に残った荒浜小学校です。荒浜小学校の最寄りの駅である荒井駅であり、そこに併設されている、せんだい3.11メモリアル記念館に寄り東日本大震災で仙台に何が起きたのか説明を受けました。そこでは、知識として知っているが、実際に現場に行ってみないとわからないようなことを数多く学ぶことができました。その後、荒浜小学校に行ったのですが、そこでも色々知らなかったことを実際に見て理解することができました。津波によって、校舎の中に車が3台入ってきたということは本当に見るまでわかりませんでした。震災の前まであった海辺の松が流され、この学校の裏にあった体育館も全壊したそうです。津波は高さ9mで押し寄せ、家の瓦礫や土砂を含む真っ黒い水が押し寄せてきたそうです。行きのタクシーの運転手さんの壮絶な体験も聞くことができました。その方も震災当時タクシーを運転していたそうです。交差点の横から水が押し寄せたのを見た時に逆方向に逃げたのですが、そのうち、足元が水で濡れ始め、そこで死を覚悟したそうです。幸いにも近くにいた人に助けられ、なんとか九死に一生を得たそうです。その時に撮られた写真が新聞にも載ったそうです。

## 仙台訪問を通して

この交流を通して、今まで住んでいた場所とは全く違う場所に行き、その文化に触れられてとても貴重な体験をしたと思います。今まで感じることはできないような刺激を感じられてとてもよかったです。八軒中学校では、生徒会の皆さんとお話しでき、こちらでも色々やってみようというところを感じられました。そして、こちらの文化のことも精一杯お伝えすることができたのではないかと思います。仙台の花火大会も見ることができたのですが、とても綺麗で、あそこまでしっかりと花火を見ることが今までなかったのもとても楽しかったです。土井晩翠のことは、今まで知らなかったことがより深く知ることができました。土井晩翠を見る目が変わる体験でした。荒浜小学校では、震災の恐ろしい姿を実際に自分の目で見て感じるすることができました。

この交流は自分にとってとても価値のある体験だったと思います。なんとなく仙台を旅行しても決して得ることのできないような貴重な体験でした。この体験をこのままにせず、これから地域に向けて、広く伝えることができるように尽力したいと思います。